



# ささへるニュース

**Vol.11**

2016年春

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial  
Health Foundation  
笹川記念保健協力財団



「ハンセン病の歴史を語る 人類遺産世界会議」  
にて講演する宮崎駿監督

## **特集** ハンセン病の歴史を語る 人類遺産世界会議

特別講演「全生園で出会ったこと」宮崎駿 アニメーション映画監督

「ハンセン病の歴史ウェブサイト」リニューアル

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

特別公開講座／2015年度 第2期生修了式／日本財団在宅看護センター開業状況／2016年度 第3期生受講者募集  
理事長メッセージ／マンスリーサポーター募集

# ハンセン病の歴史を語る

## 人類遺産世界会議

2016年1月28日～30日、笹川記念保健協力財団は、日本財団の「グローバルアピール2016」に協賛して「ハンセン病の歴史を語る—人類遺産世界会議」を東京で開催しました。初日には、日本の誇る映画監督 宮崎駿氏の「全生園で出会ったこと」と題する講演（4ページ参照）もあり、多数の方にご来場をいただきました。

### ハンセン病の歴史の課題、そして今後

会議には、日本を含む20カ国から、ハンセン病の歴史保存にかかわるさまざまな立場にいる方々に参加いただきました。当財団は、1996年から世界のハンセン病の歴史を保存する途を模索して来ましたが、20年近くが経った今日、ハンセン病の記憶を刻む施設の閉鎖・転換が各地で進んでいます。しかし同時に、これらの状況に危機感を抱き、保存のために立ち上がった人々も現れています。しかしごくわずかの例外をのぞき、それぞれの取り組みは手探りでごく小規模で行われています。今会議では、まず、どこで、誰が、何を行っているのか、あるいは行おうとしているのかを参加者間で共有し、それぞれの課題を知り、共に将来の方向性をさぐるようとして計画されました。



会場の様子

社会を構成するあらゆる要素によって成り立つ豊かな歴史が語られ、今後も語り継がれていくためには、多様な関係者が関わる必要があります。今回は、家族を含むハンセン病当事者、研究者（歴史・建築・博物館）、政府関係者（政策・療養所所管・歴史遺産所管）、ハンセン病関連NGO代表者が参加する会議となりました。

「世界の取り組み」、「保存する・学ぶ・伝える～主たるプレイヤーは誰か」、「生きた証・創造力・作品：芸術、文芸、生活用具」、「未来への遺産～実現の途をさぐる」の4セッションを設け、現状を知り、今後を考えました。

### 日本から学ぶ

会議前日には、国立療養所多磨全生園に併設されている国立ハンセン病資料館を訪問し、佐川修、平沢保治の両氏から、当事者が企画し、作り上げた、当事者主体の資料館の成り立ちについて聞き、全国ハンセン病療養所入所者協議会の藤崎陸安事務局長から、当事者組織の歴史をうかがう機会も作りました。「当事者の歴史なくしてハンセン病の歴史はあり得ない」、というメッセージを伝えると同時に、政府が自らの責任でハンセン病の歴史を保存し公開する日本の例を紹介する狙いもありました。

### 各国の状況、学び、課題

3日間の会議から、中央・地方政府の一定の関与が見られる国—中国、韓国、フィリピン、マレーシア・タイ、当事者の参画が見られる国—コロンビア、フィリピン、台湾



集合写真

といった、それぞれの国の状況の違いが明らかになりました。中国の場合、全国に複数の動きがあり、公的な支援も期待できる有利な状況の中で、当事者の意味のある参画ははまだ模索の段階です。一方、当事者組織の活動が顕著なブラジルの場合、当面する保健医療問題が大きいいためか、歴史保存に取り組むには至っていないということもわかりました。アフリカ大陸からの唯一の参加国エチオピアは、当事者組織と研究者の実績が知られていますが、今回初めてハンセン病対策当局の参加を得て、歴史保存の動きにつながるきっかけが生まれました。研究者との連携に関しては、フィリピンでは3年前から国家歴史委員会の主導で複数の研究者の共同研究がスタートしています。マレーシアでは数人の研究者やジャーナリストの実績が確認されていますが、今回の会議に参加された政府関係者と当事者などを含めて、横断的な

場を創り出せるかが期待されます。

アグア・デ・ディオス市での多彩な報告が並んだコロンビアに加えて、研究者の関心と実績がすでに確認されている太平洋諸国やブラジルなどの例も、今後のより広い展開に期待したいところです。同時に、インドを中心とする南アジア、中近東、さらにアフリカの国々での歴史保存の状況についての情報は限定的で、今後の課題として残りました。

## ハンセン病の歴史保存 これから

ハンセン病の歴史は単なる一感染症の歴史、公衆衛生の歴史にとどまらず、個人と社会の歴史だということは参加者全員の理解でした。さらに進んで、ハンセン病の歴史を自国の歴史の中に位置づける、というはっきりとした方向性のある取り組みに展開していくことが期待されます。そのためにも、近隣の国々や地域的なつながりの中で自国の歴史を検証していくという仕組みの構築には大きな意味があります。日本におけるハンセン病の歴史も例外ではありません。多様な展開がある日本の例は、今後さらに発信力を強化すると同時に、アジア・世界の中に位置づけていく必要があります。

海外から本会議へ参加した人たちが、自国のハンセン病をめぐる問題、歴史保存のあり方とその特異性、また可能性や持続性について理解を深め、将来のあり方を具体化するきっかけとなってほしいと願います。



歴史保存に対する決意表明にサインする参加者

# 宮崎駿監督が語る「全生園で出会ったこと」

ハンセン病関連のイベントが続けて行われた1月、当財団は、「ハンセン病の歴史を語る—人類遺産世界会議」を開催（P2～3ページ参照）しました。オープニングでは、世界的に著名なアニメーション映画監督であり、東京都にある国立療養所多磨全生園の人権の森構想を支援している宮崎駿氏に、ハンセン病問題に関する想いを語っていただきました。

## おろそかに生きてはいけない

宮崎監督が初めて、ハンセン病に正面から向き合ったのは、いまから20数年前のこと。のちに「もののけ姫」となった作品の構想中に、自宅からほど近い全生園に足を運んだのが、始まりでした。

全生園に隣接するハンセン病資料館も訪れ、そこで全国から集められた、療養所の園内通貨や、生活を送る上で使われてきた品々と出会った監督は、大変な苦しみの中で人が生き抜いてきた証に衝撃を受けました。訪れるたびに、「おろそかに生きてはいけない。・・・自分が今ぶつかっている作品をどう作るかということ、真正面からきちんとやらなければいけないと思った」そうです。「もののけ姫」には、ハンセン病を患った人からヒントを得た人たちも登場しましたが、完成した作品を見た全生園自治会会長の佐川修氏や、ハンセン病資料館で佐川氏と共に語り部活動を続ける平沢保治氏をはじめ皆さんは大変に喜ばれたそうです。

## 人権の森構想

現在、多磨全生園をはじめ、療養所の入所者数は減少しています。各園とも将来構想に基づき、保育所や特別養護老人ホームなど、地域のニーズに合った施設の設置を始め、隔離から地域開放へ、療養所は変わりつつあります。多磨全生園では、1940年代に緑化運動が、1980年代にふるさとの森造り計画が始まりました。入所者がいなくなった後に、この地に豊かな緑の地を残したいという思いで始まったものです。2002年には、緑と共に、歴史的建造物や史跡を「人権の森」として残すため、「人権の森構想」が立ち上がりました。この「人権の森構想」のもとを作ったのが、宮崎監督でした。

療養所には、使われなくなった建物が残されています。老朽化が進む建物の一つに戦前から残る男子独身寮「山



講演後半に全生園の友人である佐川修さん、平沢保治さんと

吹舎」がありました。「山吹寮」を残したい、そのために協力する、という宮崎監督の言葉が、「人権の森構想」につながったのです。

「全生園の緑と建物を残す『人権の森構想』に協力しているのは、友人が先頭でやっているからです。・・・大きな緑を残したということもいいことだと思いますが、同時に、生きるということの苦しさ、それに負けずに生きてきた人たちの、巨大な記念碑をずっと残しておきたい」という宮崎監督。

世界には多くの問題がある。その全てに自分が関わっていくことはできない。だから、皆が少しずつ手分けをしていくしかない。そして、「資料館や人権の森が、人間というのは間違えるものなんだ。絶対間違えないと思って間違えるのが人間なんだ、という教訓になればいいと思う。我が身をかえりみて、謙虚でいなければいけない」と言います。講演後半では、佐川氏と平沢氏も登壇しました。講演活動をめったにされない宮崎監督が、今回の講演を引き受けられた背景には、監督と深い交流を持つ両氏の存在がありました。「負の遺産」としてのみ捉えられることが多いハンセン病の歴史は、両氏をはじめとする、人間の持つ計り知れない力と可能性を示す歴史でもありました。宮崎監督が全生園で出会われた、生きる苦しさ負けずに、内から強い光を放ちながら生きてきた人たちの歴史を、人類の遺産として残し続ける努力はこれからも続きます。

# 「ハンセン病の歴史ウェブサイト」リニューアル

「ハンセン病の歴史を語る 人類遺産世界会議」の初日には、世界のハンセン病の歴史をまとめたウェブサイトのリニューアル公開をしました。ハンセン病に関する歴史的な場所の沿革から当事者のライフストーリーまで網羅したこのウェブサイトは、研究者や専門家だけではなく、誰もが使える、使いやすく魅力的なウェブサイトとして生まれ変わりました。ぜひ一度サイトを訪れてみてください！

## 新しくなったウェブサイト

急速に失われつつあるハンセン病の歴史を語り継ぐため、国際ハンセン病学会 (International Leprosy Association:ILA) は、2000年に、主に研究者の使用を想定した世界のハンセン病歴史プロジェクトウェブサイトを立ち上げました。データベースが主体の旧ウェブサイトの検索システムはすでに旧式のものとなりました。貴重な情報が集積されているにもかかわらず、旧ウェブサイトの利用頻度は低迷したままでした。そこで、当財団は、ILAと共同し、旧サイトの担当者の協力を得て、ウェブサイトを一新しました。

## 情報を検索するには 検索システム

データベースは、アーカイブ、医師や研究者・当事者などの人物、タイムラインの3種のデータから構成され、それぞれ、国やキーワード、年代などから検索することができます。新データベースには、旧サイトのデータベースをもとに、新たな情報を追加しましたが、これからも各地から寄せられた新たなデータを随時追加していきます。

## 世界地図で見る歴史的な場所

トップページの中段の世界地図には、データベースに記録のあるハンセン病にゆかりのある場所が示されています。地図上の場所をクリックすると、それぞれの場所の情報ページに入ります。地図はGoogle Mapsにつながっており、現在の当地の様子も見るができます。また、それぞれの場所はデータベースにリンクされており、データベース内の情報を閲覧することができるとともに、関連年表データ、国別のハンセン病の歴史にもアクセスできます。

## 地域の歴史の概要

各地の歴史は、コミュニティ、国、国を超えた地域の大きな歴史の流れの影響を受けています。新ウェブサイトには、各地の情報だけではなく、国、そして国を超えた地域のハンセン病の歴史の概要を加えました。ここには当時の写真も多く掲載されており、往時の様子を見ることもできます。

また、ハンセン病当事者が語るライフストーリーや、データベースに記録のある資料館の史料についての解説や、ハンセン病が法律や文化に与えた影響や、医療史におけるハンセン病、最近の歴史保存の活動な

ILAハンセン病の歴史ウェブサイト

<http://leprosyhistory.org/>



トップページ



世界地図



ハンセン病とその影響についてのエッセイ集

どのニュースなどは、それぞれコラムを設け、随時掲載される予定です。生まれ変わったハンセン病の歴史ウェブサイト、ぜひご活用ください。

## 起業家育成事業 特別公開講座シリーズ

### 記念講演 「高齢化時代の看護の力—在宅看護の役割」

## 世界と日本の看護界のトップ 在宅看護を語る!!

2016年1月17日に開催の本講演会は、国際看護師協会会長、日本看護協会会長というツートップに、WHO神戸センターの高齢化問題研究の先鋭が加わるという、過去、類をみない歴史的な機会となりました。まず、狩野恵美先生（WHO神戸センター）よりWHOが提唱する高齢化対策をご紹介いただきました。Healthy Ageingを実現するための包括的なアプローチの中で看護師が活躍できる場は数多くあり、さらに世界最速の高齢社会を邁進する日本が、諸外国の保健システムについても習熟し、経験と教訓を世界に発信すべきと述べられました。続いて、国際看護師協会会長J.シャミアン博士は、「The role of Home Care and Nurses in Keeping Communities and Senior Well（高齢者と地域社会の健康と安心の



豪華な講演者たち（左から坂本すが氏、ジュディス・シャミアン氏、狩野恵美氏）

ための看護と在宅ケアの役割）」と題し、今日の在宅看護の需要と意義の高まりを、カナダ最大の在宅医療提供組織でのご自身のご経験もまじえ講演され、「日々の実践を是非政策提言へつなげてほしい」とエールを送られました。

最後に、日本看護協会会長坂本すが博士が、在宅看護にかかわる法律・制度についての最新情報を解説されました。日本の少子・超高齢・多

死社会でのチーム医療のキーパーソンとなる在宅看護師の役割を強調され、「地域全体のケア管理者」として自分で考え、判断できる看護師になることを力強く求めました。

参加者からは「両協会長のお言葉を頼もしく感じた」「現場から政策提言していきたい」「世界的に在宅医療システムの充実が必要で、ナースの役割が大きいことを実感した」などの声が聞かれました。

### 公開講座 「認知症対応を考える」

2015年12月12日、13日は、研究者、臨床医、当事者、サポートグループ、様々な立場から「認知症」を考える贅沢な2日間となりました。

冒頭、堀内正先生（医社：聖桜会サクラビアクリニック院長）から認知症をとりまく社会的背景や課題を、続いて小竹雅子氏（市民福祉情報オフィス・ハスカップ主宰）と水谷佳子氏・竹内裕氏（日本認知症ワーキ

ンググループメンバー）からは現場・当事者の生の声を拝聴。最後は、池田学先生（熊本大・生命科学研究部神経精神医学分野教授）の学術的な超一流の講義を賜りました。認知症はうつ病や薬剤性せん妄と間違われやすく診断が困難であることや、「アルツハイマー病」以外の認知症の原因疾患、日本人に多い血管性認知症についてなど分かり易く説明

いただき、参加者からは「もっと聞きたかった」の聲が相次ぎました。他に、「保険制度策定の裏側を知り、現場から発信する大切さを感じた」「貴重な当事者の声をききケアの参考になった」「診断・病態に沿ったケア介入の必要性、問診の仕方を理解できた」などの聲がきかれました。財団はこれからも継続的に公開講座、講演会を開催して参ります。

## 第2期生が無事修了しました

2016年1月27日、大きな希望と着実な目標を胸に、第2期生の9名が旅立ちました。

当日、修了生は、達成感に満ち溢れた表情で式に臨みました。このコースについて「概念が打ち砕かれ激震が走り、頭の中が混乱して何からどう理解したらよいのか、自身の無知と視野の狭さを恥じながらも、このような非日常に身を置いて学ぶことの幸運に、感謝・感激する日々で、鎧を脱ぐ作業のようにも感じました」さらに、「国立ハンセン病療養所、グローバル企業、リハビリセンター、ホームホスピス、柏プロジェクトの見学、学会参加等々…経営

視点の学びから、人権問題、地域包括ケアのモデル地域見学と変化に富む刺激的なもので…世界の中の日本国民のひとりとして、どう自分は社会と向き合い、看護を駆使して生きていくのかを考えさせられた」と振り返りました。

日本財団笹川陽平会長の式辞では、社会のニーズにいち早く対応しモデルケースを作り、行政をも動かす力となりうる可能性にふれ、各修了生が地域社会の中核として『キラッと輝く』在宅看護センターを立ち上げてほしい、日本財団ができることは



晴れやかな笑顔の修了生とともに

サポートしたい、と述べられました。厚労省後藤友美在宅看護専門官、(公財)日本訪問看護財団清水嘉子理事長、(公社)日本看護協会坂本すが会長(専務理事井伊久美子氏代読)、(株)楓の風野島あけみ副代表らからも祝辞を賜りました。4月を皮切りに、9名全員が来年度中に開業予定です。

## 日本財団在宅看護センター 開業状況 (予定含む)

1期17名・2期9名の修了生のうち、既に、10名が「日本財団在宅看護センター」を運営しています。さらに、2016年4月には5名の開所が決まっている他、各人とも法人設立や開業に向け積極的に活動しています。

開所後、実績を積みつつある事業所は後輩の実習の場でもあります。先輩たちは開業に関するアドバイスや情報を惜しみなく伝授してくれるだけでなく、後進の大きな目標でもあります。着実に「日本財団在宅看護センター」のネットワークが全国に広がりつつあります。



## 第3期生 受講者募集中

応募方法 インターネット申請 <https://system.smhf.or.jp/app/jp/>

詳細 <http://www.smhf.or.jp/hospice/zaitaku/recruit/>

## 歴史の一コマ

2015(平27)年は第二次世界大戦終結70周年。1945(昭20)年8月14日、日本の全面降伏を求めるポツダム宣言受諾で、翌15日に戦争は終わりました。が、それに到る数カ月間の硫黄島の戦い、東京大空襲、広島と長崎への原爆投下、もし、も少し終戦が早ければ・・・どうだったか?・・・歴史に、“if”がない所以です。幼稚園に入る前の私もあの日の青空を覚えています。

歴史は個々の出来事の集積ですが、誰も、自分が歴史を作っているとの認識はありません。が、個々の人々の、日々の営み、些細な貢献やとんでもない行為が、偉大な、あるいはとんでもない歴史として後世に伝わります。

公益財団法人笹川記念保健財団の41年目に当たる年度が終わりつつあります。きちんとしたご報告は、別途作成中ですが、日々の活動、成果、嬉しかったこと、反省、毎日毎夜(多分!!)担当プロジェクトに没頭する、また裏方に徹する、その個々の歴史のパーツを本紙から感じて頂ければ幸いです。



理事長 喜多悦子

## マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまな事業を安定して継続していくために、マンスリーサポーターを募集しています。みなさまのご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただくことができます。

ご寄付いただく活動分野と口数をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただけます

一口1,000円/月をお好きな口数で

\*寄付金額の変更、停止はいつでも自由にできます。当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団の[ホームページ](http://www.smhf.or.jp/)→[ご支援ください](#)→[マンスリーサポーター](#) (<http://www.smhf.or.jp/>) をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/財団ブログ (ハンセン病対策事業/ホスピス緩和ケア事業/公衆衛生向上のための事業)  
URL: <http://www.smhf.or.jp/> facebook: <https://www.facebook.com/smhf.tokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」: 年4回発行

チームささへるニュース Vol.11 2016年春発行  
発行元: 公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
発行人: 喜多悦子  
編集: チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局 (笹川記念保健協力財団内)  
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階  
電話: 03-6229-5377 (代表) FAX: 03-6229-5388  
EMAIL: [smhf@tnfb.jp](mailto:smhf@tnfb.jp) URL: <http://www.smhf.or.jp/>

Supported by  
  
THE NIPPON  
FOUNDATION